

評啓

寧は貴福子夢に何処かに

やりと全に甚しうと思ひ考

小説の後藤石女に転子

おきくが其後迄事なく只

は田舎にあり(事とは上集

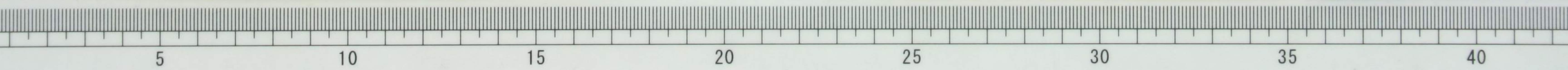
にべし)厚福のありか一寸分ら

ま、これに押つきりて去陽堂

にまこも不潔な後自身を

脱せしに以脚が痛し大に困

り申候



リ申候

この上は従五し、かの小説は、

を中にて何うにかゝるに、

我小説 駈目まらぬ金徳を

リ、又其博五羅まうに無比に

まいつくへくはる、佛教の方に

は何か別れあつたうに、

長候

勿論素花もして佛教を

合ひては後務めのよき

れんさう上申へしよるしく候さ

れど行なり、舟や之(こゝろ)

才ノ長ら引とめらゆ之(お生)

にありし、耳申候 左様ゆ

知らぬ

追々可つた、所忙し

追々可つちきし所忙しきこと
存し脚部未々令癒せざる身
は一歩の門外不出、日向ぼつ
ニリしと今年は我年を迎へ中
凡つく候一才有りし佛坐す
~~中~~ 病者多し無
聊に慰むるも大に徳と存
候可し

此はイブセン劇に遠歌り大に
いづちの業舞に相見候我々末
近者此凡に吟めし雅と一般一技
一技へとて云行はり、即筆に
とる也

ニナ

花巻

言園大兄

言洞大兄

東京牛込區 原ヶ三六八

明治三十五年 十二月 廿日

田山録彌

武州北埼玉郡羽生町

建福寺

三村玄綱様



御中様と二枚まいり但戴と一存に御かし
仕らぬ芳れ候迄世と一歩一歩おのりま
うるに御有様はきこまふ孝行多にあり
候はるま少等にほつやんと一人詩を思ひ
よき詩想よりいふまじき事と候はる候
近々形も分りまはしりまを云々候はる
著るま書忘るし假睡と催はれはかりに候近
比母の病もよくいふ水にそまゝの年仕籠
おと相送り今よりつくと踊るま講し母の
あか一昨日まうハシモワ(釣床)一張りま

此冊の病名として「此が水にそめてありぬ」の年は冠
名と相違り今よりつうくと「鶴久ノ業を講し居れ
るが一作日事ハシモワシ」の動床（動床）一張りありてこれ
と表山の形系に吊しこれに横臥してしりぞきつうく
と云然やら實相やら詩の信構やらつうくと考中
候まゝとてい地より世方をばるれりやうに候林中に
は名は知られりしもの白き山ナキ幹比五を角つとぎ
まゝしりて心敷とかいふにこれ開きしと蓋ナシ
るるの深のうらまじ口乾にわたり今ひるすことには時短と

際よりつうせし候昨日は終り林中にありてハリスル分
がが作（此書と）うき世（此書と）作者（三つほど）ありぬるる
冊子と儲きゆふが、もう作のうらまじりうきとをまゝ
うらまじり少まかうに、いとうかし申候のきこふ人は不備
と云ともものにはいとうの信を表し居る人にゆふが、いとう
と三作をよみてうらまじり十九世紀的に自然なるに
は成候し候日本ととは決してけり高きはたれ
るものに見る事を洋へかると存候る林中にありて
の中をいふは、きこふは書を意ひこふに於ては、カニセルセ
ンがサイン、フォルメル、ニヒル、サイ、ゴ、コ、リ、の意相集、ウ、ル、テ、ニ
ーフの春潮、ソ、ラ、タ、ヒ、ユ、モ、コ、ル、ツ、る、と、其を構ふることに
於ては、ありぬるる一冊にありぬるる）（ハシモワシ）釣床日録、その他二
三冊の作に候、見えしは、今存る中や、ありぬるる中、ありぬるる

フの春潮、ソラヲヒユモコフルーツるど、其を捕ふることに
 於ては、予既（ニ）此（一）冊に多る（ヨ）
 三〇此作に候、日見し日令、存る中、やと、あり中、向以、
 上程の運、初年、一く、多、候、より、夏より、秋に、かけ、
 為に、一き、事、多く、考ふ、一き、事、多く、行ふ、一き、事、多く、候、と、
 此、と、考ふ、考ふ、想、と、皆、昨年、より、一は、黒、り、昆、中、候、と、
 は、ま、ま、と、に、少、年、と、全、く、相、別、れ、申、候、悲、し、く、候、豈、又、此、れ、
 何、の、利、佐、子、
 乙亥 孫

日老山中

穢
 田中 信房

三月廿一夜



東京牛込一馬町五十一番

町七番地伊藤孫文

太田 山名 孫文

年八月廿

田山花袋書簡二通

大田玉



特別

文庫14

C35